

月刊

# いじろのとも

第十一卷

五月号

## お仕えるもの

赤ちゃんは

一歳くらいまでは

親によって

どこまでも

お仕えしてもらうもの

いま虐待が多発するのは

そののできる親が

少なくなってしまうた

ということ

## 報復は遺伝情報

今の世は

自己に執らわれ

報復を

ひとの遺伝子

なせる業だと

# 人生を考え直して

## みたい人は（七六）

『正法眼蔵』解説（二〇）

有時（うじ）の巻を続けます。

しかあるを、仏法をならはざる凡夫の時節に、あらゆる見解（けんげ）は、有時のことばをきくにおもはく、あるときは三頭八臂（さんずはつぴ）となれりき、あるときは丈六八尺となれりき、たとへば、河をすぎ山をすぎしがごとくなり。いまはその山河たとひあるらめども、われすぎきたりて、いまは玉殿朱楼（ぎよくでんしゆるう）に処せり、山河とわれと天と地となりとおもう。

しかあれど、道理この一条のみならず。いはゆる、山をのぼり河をわたりし時に、われありき、われに時あるべし。われすでにあり、時さるべからず。時もし去来（こらい）の相にあらずば、山上の時は有時の而今（にこん）なり。時もし去来の相を保任せば、われに有時の而今ある、これ有時なり。かの山上渡河の時、この玉殿朱楼の時を吞却（どん

きやく）せざらんや、吐（と）却せざらんや。

例のように、参考までに現代語訳として、玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵1』（大蔵出版刊）のものを引用させて頂きます。

こついうわけであるのに、仏法を学ばない凡人の場合には、有時について、さまざまの見解をいだく。すなわち、有時とは、あるときは三頭八臂の不動明王となり、あるときは一丈六尺や八尺の仏身となつた、と思う。たとえば、自分は、河や山を過ぎてきたというようなものである。たとい、その山や河はあるにしても、わたしは、それらを過ぎて来たって、現在は玉殿朱楼にいる。すなわち、山河もあり、われもあり、天も地もあると思う。

しかしながら、道理はこのようないすじだけではない。実は、山にのぼったとき、河をわたったときに、われはすでにあった。そのわれには時がある。しかもそのわれはすでにここにいる。だから時は去るはずがない。もし時に去来（こらい）の特徴がないとすれば、山にのぼったとき、その時が絶対で永遠の今である。また、もし時が去来の特徴を持つているとすれば、わたしが絶対で、永遠の今である。

したがって、山にのぼった時、あるいは河を渡った時、その時は今の玉殿朱楼の時を呑みつくし、吐きつくさないことがあるのか。

この部分も、けっこう難解です。これを、便宜的に前半と後半に二分しますと、前半は現代語訳で大体ご理解頂けるのではないかと思います。でも、後半は、現代語訳を読んでみても、よく分からず、かなり難しいのではないかと思います。順次、解説していきます。

先ず前半ですが、ここに出てきます言葉は、多くがこの「有時の巻」の第一回目（第十一巻一月号）に出ています。一度取り出してご覧頂ければ幸いです。

そこには、「丈六金身これ時なり」「三頭八臂これ時なり」とあります。この意味は、その解説をご覧頂きたいと思いますが、この有時の巻の書き出しで、このように道元が述べるのですから、「有時のことばをきくに」前出のように「あるときは三頭八臂（さんずはつび）となれりき、あるときは丈六八尺となれりき」と思うのは普通の人にとっては、当然と言えば当然なのです。なぜなら「甲が時なり」と言われれば「ある時は甲なり」と理解するのが一般的だからです。ましてや、古仏の言に「有時三頭八臂」といった文章があるのですから、ですから、「ここであるとき三頭八臂となれりき、

あるときは丈六八尺となれりき」と、第一回で解説したものは内容が異質なものと言えます。

ということは、「時」と「有時」と「あるとき」とは、当然ながら意味が異なっているということです。

いままで述べてきたことですが、有時とは、自己と他己が完全に統合されていて、精神の働きとしての過去と未来が現在に全て含まれている状態にある時のことを言います。なるほど「有時」は訓読みでは「あるとき」と読みますが、しかしそう読んでしまいますと私たちが常識的に使っています、「あるとき、これこれをした」といった言い方と区別できなくなってしまうのです。普通の人は有時を聞くときそう思ってしまうということです。

さて、後半ですが、このように「有時」は、特定の時点を示している言葉ではないのだということを言っているのです。これまでの私の解説をよく読んで頂ければ、もう説明の必要はないと思います。

私の理論では、自己と他己が無意識で統合され、解脱に到りますと、過去と未来が現在に含まれることとなります。順序が逆になりますが、そのことが、最後の結論にあります。「これ有時なり。かの山上渡河の時、この玉殿朱楼の時を呑却（どんきやく）せざらんや、吐（と）却せざらんや。」ということなのです。例えば、山上渡

河の時点から言えば、未来に属するであろう玉殿朱樓の時は既に含まれていた、つまり吞却されていたと言えるでしょうし、現在の玉殿朱樓の時から言えば、過去の山上渡河の時は今に吐き尽くされているといえるのです。

こうした境地が、有名な「有時の而今」なのです。それは、「過去と未来が統合されている現在」のことですが、そのことを強調してこう言っているのです。

説明を先に進めて、この後半の初めの部分の「時さるべからず」までは、現代語訳でお分かりと思います。

次の「時もし去來の相にあらずば、山上の時は有時の而今なり。時もし去來の相を保任せば、われに有時の而今ある、これ有時なり。」をもう少しだけ解説しておきます。ここに出てきます「相(そう)」ですが、それは、様相とか、特徴とか、属性とか、徴候といった意味です。しばしば、「体(たい=本質)」と「用(ゆう=はたらき)」と共に用いられます。

さて、この部分の意味ですが、時間が、過去とか未来の様相をなさないならば、山上に居たその時点は、「有時の而今」と言えます。ところが、時間が過去とか未来といった様相を保っているとしても、自分自身は「有時の而今」の境地にありますから、その時点での時間は、「有時の而今」と言えるというわけです。

## 自作詩短歌等選

### 愛は与えるだけ

愛はギヴウ・アンド・ギヴウ  
でも

現在の世の中は

愛をなくして

すべての人間関係が

ギヴウ・アンド・テイクの

世界になっている

ということとは

みんなが

愛を欲しがっているので

どうしても

与えるものより

取るものの方が多くなり

テイク・アンド・テイクの

世界になっていく

ということ

かつては母が

家族の皆に

愛を与えた

でも

いまは与えないで

欲しがっている

司法もむちゃくちゃ

警察も

検察すらも

ずさんなり

無実の人を

一年も

監禁した罪

どう償うか

## 民主主義のなれの果て

法律で  
あらゆることを  
決めなけりや  
社会の秩序  
保てない  
民主制度の  
なれの果てなり

## 食料捨てる日本人

食料を  
輸入すれども  
食べきれず  
多くを捨てる  
日本人  
天罰あたるは  
時間の問題

## 家庭内暴力増加原因

口のたつ  
女の人も  
増えたけど  
暴力つかう  
傾向も  
男の人に  
強くなり  
家庭の暴力  
問題となる

## 自堕落が本望

自堕落に  
暮らすは本望  
死にても可  
なのに死なずに  
全介助  
迷惑するは  
介護する人

## 仁が廃れて義おこる

徳目を  
教えるだけで  
倫理観  
高めることが  
できるのか  
老子の教え  
学び直せよ

## 役割遂行のみの家

家事さえも  
業務の一つと  
する家の  
あり方示す  
家族経営  
協定を  
農水省が  
推奨す  
とうとうそこまで  
来てしまったのか

## 脳梗塞は生活習慣病

このところ  
脳梗塞が  
増えている  
食習慣を  
改めるべし

## 自作随筆選

### なぜ日本の首相は軽いのか

平成十二年四月十六日付け読売新聞の「自由席」という欄に、同社の論説委員・梶原誠一という人が、「軽い首相に何ができる」と題して記事を書いていました。

それによりますと、日本ほど首相がよく変わる国はない、ということでした。確かにこの六年間で細川から、羽田、村山、橋本、小淵、森と変わっています。アメリカやドイツやロシアでは、こんなことはありません。

なぜ、日本ではこうなってしまうのか、原因が分からない、とこの人は述べたのち、最後の部分で次のように書いています。

つまりは政治権力をどれだけ重大にとらえ、尊厳と信頼を寄せるかの問題だろう。

金融、半導体で世界に影響力を持つ日本の首相だが、海外での知名度はゼロに近い。日本はこのままでいいのかということだ。

確かに、この人の指摘する通り、経済的な力を思う時、日本の首相の世界に及ぼす政治的な影響力や、国民が首

### 人間宣言

人は生まれながらに  
無力であり  
不自由  
不平等である  
したがって  
生まれながらに  
他者に支えられて  
はじめて  
不自由を逃れられる  
存在である

また  
人は  
生まれながらの  
不平等を  
他者を支えることで  
平等にする  
こころの働きを  
もつ存在であり  
誰でもが  
平等に死んでいく  
存在である

相に懐く尊敬の念の軽さは、今や世界に類を見ないと思います。それは、この人が書いていますように、日本人は、「政治権力を重大にとらえ、尊厳と信頼を寄せる」ことが少ないということだと、私も思います。

では、なぜそうなるのでしょうか。この人はそれが分からないらしいのですが、でも、それは、きっと日本人の誰もが分からないのではないのでしょうか。私は、寡聞にして、それが分かる人の言に出会ったことがありますん。

私は、それは、以下述べますように、日本人が民主主義以外に思想を持たなくなったことに起因するのではないかと考えています。

日本人は、明治になって、欧米の列強に追いつき、追い越すために、仏教を捨て（廃仏毀釈令）、欧米に模して唯一絶対な神として（万世一系たる）天皇（現人神）を位置づけ、神道と儒教を思想的バックにしました。そして、それを教育勅語によって国民に教育したのです。でも、それも、太平洋戦争の敗戦によって、昭和二十年には捨てさせられました。そして、公立の学校教育から一切の宗教教育を排除させられたのです。こうして日本では、思想と言えそうなものは、（自由主義的）民主主義以外にはなくなってしまったのです。ですから、日

本の陥っている現状を理解するには、そもそも民主主義とは何かを考えなくてはならなくなっているのです。以下、民主主義の本質について根本的に考えてみたいと思います。

民主主義は、まず第一に、私の理論で言う「自己」を追求する制度と言えます。そこでは、他者性（他己）は二の次にされているのです。

そのことは、例えば、民主主義の確立に決定的な役割を果たした、ホッブス、ロック、ルソーなどに共通に見られる「人間は元来、自由で平等」だとする基本的な考え方によく現れています。

唐突ですが、この主張は「自己」への執着を離れて考えますと、まったくの間違いです。人間は基本的に社会的存在なのです。つまり、人間を、社会をなす他者との関係で考えますと、まったく自由でも平等でもないということなのです。

例えば、それは、人間の誕生時のことを考えてみれば、直ちに理解することができます。人間が元来自由であるのなら、生まれてすぐ自由でなければなりません。しかし、誰か他者の存在がなければ、人間は自由どころか、直ちに死に至らなければなりません。自由があると、言うなら、それは、いわば死の自由があるだけなのです。

普通の言い方をすれば、極めて不自由で、弱い存在だと言えます。これは何も、赤ん坊だけの話ではないのです。たとえ成人しても、他者なくしては自由ではあり得ません。他者がいなければ、生活に必要なものはすべて自分で作らなければなりません。それがどれほど不自由かは想像してみただけで十分お分かりだと思います。また、国でいつても、いま、日本人が謳歌しているこの贅沢な暮らしは、外国の貧しい人たちの安い労働力に負っているのです。それを収奪しているお陰なのです。

話しを平等に移してみても、自由の場合と大同小異です。人間は、生まれたときから不平等なのです。容貌も能力も千差万別です。また、親の経済状態も人格も同様です。どこにも平等など存在しません。先程の国でいいましても、餓死者が多く出ている国（地域）や内戦の絶えない国（地域）に生まれる人と、平和で豊かな国に生まれる人では、天地の差があります。あるいは、同じ国内でも、生まれる人種や身分によって実質的に差別が存在しているのです。

実は、こうした不平等を、平等たらしめる原理は人間のもつ精神の働きとしての他者性（他己）の中にしか存在しないのです。自己を追求する民主主義の原理の中にはありません。そのことが、封建制度に抑圧されていた

せいもあるのですが、民主主義確立者たちの頭の中には、存在しなかったようです。

そうした人たちが、勿論、他者ないしは社会への配慮を全く欠いていたわけではありません。もし、欠いていたのならば、ホッブスの言うように、直ちに「人は人に対して狼」となり、「万人の万人に対する戦い」となってしまうていたでしょう。

こうした傾向を全く逃れている訳ではありませんが、でも、完全にそうなっている訳でもありません。そうした状態にならないようにするために、民主主義確立者たちは、人間が、狼のような動物と違って、「理性的な存在」であることを前提として、自分に都合のよい解決法を考えたのです。

それは、自分が自由で平等であろうとするのなら、他者もそう思っているのだから、お互いにそうなるように「約束」で解決すればよいと考えたのです。その約束の内容には前述の三人の間で多少違いがありますが、一般にはそれを「社会契約」と呼んでいるのです。

でも、それが、基本的に他者性を欠いていて、きわめて自己に閉じたものであることは、例えば、そうした人たちの影響下で生み出されました、アメリカ独立宣言のことを思えば、よく分かります。つまり、その中には平

等と自由がうたわれていましたが、それは白人（特にアングロサクソン）という人種（自己）に閉じては通用しませんが、同じ人間である、当時の先住民の人や黒人や黄色人種という他者には適用されなかった、ということなのです。そして悲しいかな、現在のアメリカ社会の現状やアメリカが唱える規制緩和、自由競争、グローバリゼーションなどを見ていると、現在でも、こうした状況は解消されていません。

では、どこに間違いがあるのでしょうか。あるいは、他者性を回復するにはどうすればよいのでしょうか。多くの人は、理性は人間の本質で、それを考慮しているのだから、それ以上により解決法がある訳がない、と考えるのだと思うのです。

でも、私は、人間の本質の捉え方に間違いがあると思っていますのです。

人間の精神には民主主義が追求しようとしている「自己」だけがあるのではないのです。他者のことを思う、「他己」という精神の働きも持っているのです。あるいは、人間は理性をもつ前に、その基礎には「人の心を感じるころ」である「感情」も持っているのです。もつと言いますと、人間は理性で動いているのではないのです。私の「人間精神の心理学モデル」で言いますと、理

性（認知・言語機能）の基礎には、情動・感情機能があるのです。

前述の三人は、共に人間の行動の原動力として、「欲望」を積極的に肯定しています。でも、人間を動かすものは、自己の欲望だけではないのです。それに拮抗した「感情」も働いているのです。あるいは、働かすように努力しなければならぬのです。人間は本来、そうした存在なのです。

この感情という精神の働きは、人間が動物から人間に進化したとき、人間の基本的条件として、キリスト教的に言いますと「神から授かった」ともと言えるのです。近代合理主義を支える理性はその後で人間に備えられたものなのです。人間の本質は、自己から他己が分化して、動物にはなかった感情を頂いたことにあるのです。この人間の本来的な契機を取り戻さないかぎり、民主主義の自己追求性を解消することは出来ないのです。つまり、どんなに「理性的に」約束を作って、「憲法」に書こうとも、あるいは、「条約」を取り交わそうとも、それは、紙の上に書いたただの絵空事に、いつかは終わってしまいう可能性が高いのです。

しかしながら、こうした民主主義の限界・制約にも関わらず、欧米ではもう何百年も民主主義が続いてきまし

た。それは、なぜなのでしょう。日本では戦後五十年しか経たないのに、人々、特に若者のところが荒廃して、社会が崩壊しそうになっているのです。

私は、それは、欧米にはキリスト教が根強く息づいてきたからだと思うのです。

既に、宗教改革をなしたラターやカルヴィンでは自己傾向が見受けられますが、しかし、キリスト教の説く「隣人愛」や、ウエーバーも指摘しましたように、資本主義の発展に多大な貢献をしました「勤勉・節制・まじめ・質素などの禁欲的倫理」など、神の課す義務（人の義）は、憲法や条約のような「社会契約」を超えて人間に、他己の働きをもたらしてきたのです。ここに欧米と日本の決定的な相違があるのです。日本人は、近代化の中で、前述のように、仏教も儒教も神道もすべて失ってしまいました。それに較べて欧米ではキリスト教が、人々の心の中にずっと存在し続けてきたのです。

でも、いまや欧米も徐々に宗教性を失って来ています。このまま、積極的な欲望の肯定（利便性・快適性・享楽性の追求）が続きますと、地球はやがて疲憊（ひはい）して滅亡せざるを得ないと思います。

このように、人のことを思う他己性を失いますと、記事を書いた編集委員の人の言う、他者への信頼感もなく

なりますし、あらゆる権威はなくなって行きます。

民主主義では、親も子も同等・対等ですし、教師と生徒も同様です。人間として、みんな同等・対等な尊厳をもっているのです。一人一人が思想をもち、それを議論を通じてぶつけ合い、説得し合つて、意見が合わない時は、最後は、集団の意志を多数決で決めるのです。

こうして、ルソーの言う「一般意志（＝常に公共的利益をめざす誤りのない意志）」に到達するという訳ですが、私から見ますと馬鹿げた話です。でも、それを超える哲学をだれも提示し得ていません。

こう考えてきますと、この人がいう「政治権力を重大にとらえ、それに尊厳と信頼を寄せる」ことは、民主主義の原理に矛盾するのです。

民主主義だけが行動の支えとなる社会では、必然的に「あらゆる権力」は権威を失い、誰も権力を重大とも尊厳があるとも思いませんし、信頼もしないのです。なぜなら、あらゆる人が同等・対等だからです。

そうした社会では、伝統や慣習は廃れ、人々の規範性は薄れ、歴史が意味を持たなくなつて、あらゆることが規則（法律・法令など）で決められ、しかも、その規則は朝令暮改になつて行くのです。それは、常に、その時その時の多数の人の「利益と選好」に基づいて刻々に変

化していくということ。ということは、あらゆることが刹那的になって行くということでもあります。

これが、民主主義以外の全ての思想を失った日本で、軽い首相が次々と誕生する真の原因なのです。

ノーベル経済学賞を受賞したブキャナンとそのグループの人たちの書いた本の中にも、「行き詰まった民主主義」を打開するためには「利益と選好の極大化」に努めるべきことが述べられています。そのことは「自己」の契機をなす「自我（自己中心的なはからい）」と「情動（欲望・情緒・気分など）」の働きのみに頼ろうとするものです。そこには、全く「他己」の契機が失われているのです。

意識水準で言いますと、いま緊要なことは、そこに、「人の心を感じるころ」である「感情」と他者の意図や期待に従って行動しようとする「人格」の働きを取り戻すことなのです。

それは、一口で言いますと中国で重視された価値、特に孔子が説いた、「仁」を実現することです。「己を制して、他者を立てる」という価値を見直すことです。

あるいは、もつと言いますと、この編集委員の人が書いています、政治権力への「信頼」を取り戻すためには、飛躍していると思われるかもしれませんが、信仰を取り

戻さなければならぬのです。

人を信じる精神の働きは、「あたま」でそうしようと思つてできるようなものではないのです。私の理論で言いますと、自己と他己を統合する働きがなければ、そうはできないのです。その統合の働きは、実は、意識水準だけでは不可能なことです。無意識を磨かなければなりません。実は、それは、仁についても言えるのです。道元が「人は磨いて仁に至る」と言っていますが、それは、このことを言っているのです。

自分が相対的存在であり、有限で時間的であることを心底からよく自覚し、絶対で、無限・永遠なる境地に達した聖者（釈尊・老子・ソクラテス・キリストなど）の言われることを信じて、それに則つて生きるときだけ、私たちは、自己中心性を脱して、他者と共に仲良く平和に暮らすことができるようになります。また、冒頭の記事を書いた編集委員の人の言う、「政治権力の重大性とその尊厳の認識や、それへの信頼」を取り戻すことができるようになります。しかし、その道は、繰り返すようですが、悲しいかな、民主主義の原理の中には存在しないのです。

私は、多くの人が、そのことに早く気づくようになつてほしいと、切に願っているのですが・・・。

後記

- 一、もう周辺の田んぼでは、田植えが始まっています。曆の上では、夏ということで急に暑くなって来ました。新緑がとも目にはえます。
- 二、今月も、先月に続いて随筆が長くなり、「釈尊のこ とば」をお休みさせて頂きました。また、道元の『正法眼蔵』の解説も、少しことば足らずになつてるところがあるかもしれません。でも、よく原文と対応させながらお読み頂ければ、ご理解いただけるのではないでしょ うか。
- 三、今月の随筆「なぜ日本の首相は軽いのか」は、今度書く予定の「民主主義に関する論文」の下書きになりそ うなものになりました。
- 四、この随筆の中には、西洋の思想家の考え方や哲学な どが、突如、引用されていたりして、とまどわれたかもし れません。論文では、彼らの主張を文献を引用しなが ら、詰めていきたいと思つています。
- 五、先般来、高校生（にあたる年齢）の若者が、凶悪な 犯罪を三件おこしました。一つ目は、男子との異性不純 交遊を注意されて、女子が父親を刺殺した事件です。二 つ目は、殺す経験を試みたかっという動機と言えな い動機でえんもゆかりもない婦人を刺殺した、秀才と言

われる子の事件です。三つ目は、バスを乗っ取り、一人 刺殺し、何人も傷害を追わせた事件です。これらの事件 を見ていますと、私の言う「自己肥大・他己萎縮」が、 ますます若者に進行していることが、よく分かります。

六、いま議論になつています憲法改正も教育改革も、民 主主義そのものを問い直すことなくしては、改善ではな く改悪になつてしまう可能性が高いように思えます。

七、まず、緊要なことは、日本人が「他己」を含んだ、 「真の思想」を取り戻すことです。例えば、その候補と して、日本人が元来培つてきた宥和（ゆうわ）の精神が あります。それは、私の理論の中に含まれるものです。

月刊 こころのとも 第十一巻 五月号 (通巻 一二五号)	平成十二年五月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（しょうせい）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を 次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさ と 口座番号 01610 8 38660	

